

プレイセラピストの実践能力とその 変容過程に関する研究

——臨床経験年数の違いから——

田 屋 景 子

1. 目的と問題

1-1. 目的およびその背景

Caillois (1967) は遊びを「自由で自発的な活動で、喜びと楽しみの源泉」であるとし、矢野 (2006) は「遊ぶために遊ばれることで、遊びが本来もっている生成の力と奥行きが広がる」と遊びそのものに創造性があるとした。一方、遊戯療法における「遊び」は、遊ぶ相手 (以下、Th.) との間で成立し、両者の関係性によってその姿を変える。そこに遊び手 (以下、Cl.) の内的世界が象徴される。精神分析学派の Freud (1974) は、Cl. に対する教育的配慮の必要性を強調し、Cl. と陽性転移関係を築くために「遊び」を用いた。Klein (1975) は言葉に代わる手段として、「遊び」に象徴される子どもの内的世界 (子どもの不安、内的空想、Th. に対する転移感情など) を解釈し、分析的アプローチを行なった。その後、Axline (1947) は Rogers の来談者中心アプローチの原理を基本とした非指示的遊戯療法を提唱した。「遊び」のなかで Th. が Cl. の気持ちを受容し、信頼関係を形成することで自己治癒力の促進に繋がるとした。また、Moustakas (1959, 1997) は「遊び」の中で起こる Th. と Cl. の相互作用や発展的な関係が、Cl. を変化させるに効果的な構成要素であるとし、関係性を主体とした遊戯療法 Relationship Play Therapy を提唱した。

遊戯療法は「遊び」を媒介とする心理療法であるため、Th. は「遊び」に込められた Cl. の気持ちを理解する必要がある。Axline は非指示的遊戯療法の基本原理の中で、「Cl. の表現している気持ちを認知し、Cl. が洞察を得るようなやり方で反射しなければならない」と述べている。足立・森田 (2002) は「自由で守られた空間の中で行う遊びは、子どもの内的世界を表現しえる重要な媒体」であり、「Th. は Cl. の行動の裏にあるメッセージの理解と受容が必要である」と提言している。また、弘中 (1999) は「遊戯療法の遊びそれ自体がメタファーの機

能を持ち、その背後にある Cl. の気持ちを大切にしながら、メタファーのレベルでの反応が必要である」としている。つまり、Th. が Cl. の気持ちを理解し、適切な応答をすれば、治療は進み、良好な関係が構築されと考えられる。

しかしながら、遊戯療法の担い手は比較的若い人たちに偏りがち（弘中, 2002a, 2002b）であり、初心者 Th. が Cl. の表現を理解することは容易ではないと考えられる。東山（1982）は「Cl. の表現するレベルに合わない遊びは、Cl. を傷つけ、受容や共感も色あせ、セラピーそのものが表面的になる」と Th. の態度が治療に大きく影響するとしている。Th. の熟達化が課題として挙げられる一方、技術が未熟な初心者でも治療を進展させる場合がある。Th. 自身の資質によるところも大きい、子どもを理解し大切にしようとする気持ちと熱意（東山, 1999）が初心者の実践能力と言えるのかもしれない。

冷水（1982）は初心者から熟練者へと進んでゆく発達の道程を一種の「熟達の過程」とし、Auerbach&Johnson（1977）は変化の過程を明らかにすることで望ましい変化をより効果的に促進できるかもしれないとしている。本研究でも初心者から熟練者までの過程を熟達化とし、各経験区分の実践能力とその変容を明らかにする。Th. が自らの態度を振り返ることで、Cl. やケース理解の一助、今後の指針になることを本研究の最終的な目的としたい。なお、実践能力の獲得過程に関する探索的研究も行う。

1-2. 先行研究の概観と問題点

Th. の実践能力や理論的検討の研究は少ない。その背景にある問題点を弘中（2008）は次のとおり挙げている。①遊戯療法が容易に行える治療法であるという認識の低さや誤解、②遊戯療法に継続して携わり続ける Th. の不足、③多種多様な理論的立場の存在、④遊戯療法の中で言語化された情報の入手が困難。

Th. の実践能力に関しては安倍（2010）の研究がある。遊戯療法の実践で必要とされる Th. の態度項目が設定され、訓練生が遊戯療法の過程を理解する視点として次の3つの概念が見出された。① Cl. とともに楽しむ感覚を「共有、共感」、②セラピー場面での Cl. 理解を「アセスメント」、③治療目標の意識を「技法」。遊戯療法における Th. の実践能力と経験年数の相関については丹下・日野（1982）の研究がある。遊戯療法に携わる Th. の臨床経験を3年未満と3年以上に分け、それぞれを初心者群と熟練者群とした。Cl. に対する態度や感情および Th. の自己認知の違いが検討され、初心者群より熟練者の方が Cl. の心理的な動きをセラピー中に認識していることが示唆された。

他に遊戯療法の実践能力や変容過程に関する研究は見当たらなかったため、遊戯療法の Th. 対象ではないが、本研究と関連する先行研究を挙げる。経験年数の違いによる Th. の行動特

性を比較検討した鈴木（1995）の研究では、初心者群（臨床訓練中の大学院生）・中期群（～15年）・長期群（16年以上）の3群に経験年数が分けられ、質問紙調査により初心者群と長期群の行動特性が比較検討された。臨床場面での緻密性に関する項目で、初心者群より長期・中期群に高い尺度得点が示された。武島ら（1993）の研究では経験年数を(1)1～4年、(2)5～10年、(3)11年～15年、(4)16年以上の4群に区切り、技法選択や治療内容などにおける治療者の行動・態度の違いが比較検討された。経験4年以下の治療者はそれ以上の治療者よりも指示的であること、5～15年の中堅の治療者は4年以下や16年以上の治療者よりも力動的理解の枠組みを用いるとの結果が明らかになった。新保（2002）は初回面接の冒頭場面を心理アセスメントの過程とし、経験年数の違いからカウンセラーの内的な思考・感情過程の実態を解明し、その結果を実証的に明示する試みを行なった。対象者は、初心者群（大学院生）、初任者群（就職後1～5年まで）、中堅者Ⅰ群（6年～10年まで）、中堅者Ⅱ群（11年目～15年まで）、熟練者群（16年以上）の5群に振り分けられた。熟練者群になるにつれて、理論や技法が自然な状態で活用できおり、CIの状態像や事例を正確に把握しているとの結果であった。

実践能力の獲得に関連する研究として、臨床活動に影響を及ぼしている体験を自由記述により回答を求めた鈴木の研究がある。体験が生じた年齢・内容・受けた影響の内容の記述が求められ、臨床経験年数による比較が行なわれた。初心者群は人生経験から、中長期群は人生経験と臨床経験の半々から影響を受けているとの結果となった。加えて、初心者群は臨床経験を場面単位で取り上げ、長期・中期群はケース単位で取り上げる質的な違いも見られた。

本研究の目的からみると、上記の先行研究について次のような問題点があると考えられる。安倍の研究は調査対象者を初心者群に限定しており、他群との比較やTh.の実践能力とその変容についての検討はされていない。丹下・日野の研究は経験区分が初心者か熟練者の両極に分かれており、鈴木の研究の中期群も訓練後～15年と設定が幅広い。そのため、実践能力における群間の緻密な変容過程を辿ることは難しく、十分な調査対象者数の確保と経験区分の細分化が必要となる。武島らの経験区分には初心者である大学院生の設定がない。

1-3. 本研究の基礎となる理論的枠組み

本研究の基礎となる理論的枠組みは、Stern（1985）の「情動調律」が主となる。なお、この理論的枠組の妥当性とさらなる理論展開については、本研究の調査結果に基づいて後述の「総合的考察」で検討する。弘中（2008）は遊戯療法の非言語的なコミュニケーションが、Sternの「情動調律」と深く関連すると示唆している。Sternは乳児と母親の非言語的なコミュニケーションとして情動の交流である間情動性を次のとおり説明している。(1)母親が乳児の行動から感情状態を読み取り、(2)単なる模倣でなく、何らかの形で乳児の感情に対応した行動をと

り、(3)母親が対応して示した反応が乳児のもともとの感情状態と何らかの関係があると乳児が読み取る、これら3つの条件が揃って、ある人の感情状態が他者にも分かり、かつ2人は言葉がなくても感情の交流が行われる。「情動調律」は内的状態の行動による表現型をそのまま模倣することなしに、共有された情動状態がどんな性質のものかを表現する行動のことを言う。これを Th. と Cl. に置き換えると、(1)Th. が Cl. の感情状態を読み取り、(2)Th. が Cl. の感情に対応した行動をとり、(3)Cl. が Th. に自分の気持ちを理解してもらえたと感じるとなる。つまり、「情動調律」されることで両者の気持ちが通じ合えた状態になると考えられる。

弘中 (2008) は Th. には「情動調律」的な応答と子どもの意図・期待を敏感に察知した「共感的反応」の二つを組み合わせた「情動調律的共感反応」が求められるとしている。Stern は「情動調律」とは無意識的に行うが「共感」は知的過程を媒介として起こってくるものであるとし、「情動調律」と「共感」は異なる間主観的アプローチであるとしている。遊戯療法における「共感」について、弘中 (2002) は Axline の第4原則を「共感的理解」とし、遊びのなかで Cl. の表現を敏感に理解し、理解したことを適切な言葉や態度・行為により伝え返していくと説明している。つまり、「情動調律」は情動の交流が起こり、結果的にお互いの気持ちが通じ合うが、「共感」は Th. が Cl. の気持ちを理解したと伝え返すことで、Cl. が自分の気持ちを自分以外の他者に理解してもらえた、受け容れられたという経験を促すアプローチであると言える。本研究ではどちらのアプローチも Th. には必要な実践能力であると考えている。

Stern は「情動調律」も「共感」の過程も「感情の共鳴」から起こると述べている。「感情の共鳴」に近い状態として鯨岡 (2006) の「成り込み」という考えが母子間の情動共有状態を説明している。私という主観において、相手の主観のある状態が分かる、相手に浸透している生気衝動 *vitality affects* がこちらに伝わり、私の主観になかにある感じ (つまり何らかの *vitality affects*) がおのずと喚起される。鯨岡は人間の原初的なコミュニケーションにおける養育者と子どもの初期愛着関係の成立に「肯定的な情動共有経験」の繰り返しが重要であるとし、「情動共有」することや「情動感応」に基づいて気持ちが重なり暖かな安心感や関係性が生まれるとしている。初心者 of Th. は、Cl. の気持ちを理解するという技量が熟練の Th. より不足していると考えられるため、まずは「情動共有」することで情緒的絆をつくり、関係性を主体としたアプローチを行うと考えられる。

1-3 で取り上げた武島らの先行研究で、5-15 年の中堅の治療者は「精神分析的理解」によるところが大きいとの示唆から、Th. の実践能力においても経験年数による「精神分析的理解」の比重を考慮する。安島 (2000) は遊戯療法における精神分析的理解の重要性について次のように述べている。「遊戯療法は遊びで表現された意味が象徴的に受け取られ、理解される過程」であるとし、「Th. が Cl. からの投影を受け止めることや、Th. 自身に起きている逆転移

を意識することは Cl. 理解につながる」としている。

以上より、Th. の実践能力の仮説モデルは、「情動調律」「共感的応答」「情動共有」「精神分析的な理解」の要素で構成される。各構成要素の Th. の熟達レベルについて、関係性を主体とした「情動共有」や「情動調律」は先述したとおり初心者の実践能力とする。「共感的応答」や「精神分析的な理解」は、適切な応答を瞬時に行うこと、精神分析への知見が求められること、武島らの研究などから熟練者の実践能力とする。

本研究の初心者と熟練者群の枠組みは、経験年数による区分を用いる。冷水によると、熟練者とはある特定の領域で長期にわたる学習や練習を積むことで数多くの知識や優れた技能を獲得した者を指している。1-2 の先行研究でも経験年数による実践能力の違いが見出されている。区分設定は訓練生である大学院生の枠と、先行研究を参考にした5年毎の区切りで行う予定であった。しかし、経験年数が上がるにつれて Th. の数に減少の傾向がみられたことから、区分の経験年数を次のとおり見直した。①大学院生で経験年数が2年未満である群を初心者群、②2年以上～6年未満を中期群、③6年以上～10年未満の中長期群、④10年以上の長期群。鈴木らの研究より、臨床経験年数のみで実践能力と直線的に結びつけることへの懸念を示唆されているため、本研究では担当 Cl. 数や使用する技法の影響についても考慮出来るように配慮された。

1-4. 仮説の設定

1-3 に基づき仮説を下記のとおり設定する。

仮説1：遊戯療法の実践能力とは Th. の「情動共有」「情動調律」「共感的応答」「精神分析的な理解」から成る。

仮説2：初心者群の Th. は「情動共有」や「情動調律」により Cl. を理解し関係を深める。

仮説3：臨床経験を積み重ねるごとに「共感的応答」や「精神分析的な理解」を用いながら遊戯療法を展開していく。

仮説4：仮説1の実践能力は遊戯療法の実践の中で獲得される。

1-5. 用語の定義

(1) 情動

Stern の言う情動 affect は喜び、興味、苦痛、驚き、怒りに関連する別個の情緒 emotion も含む。本研究の情動も情緒を含み、「どのように感じるか」(Buirski & Haglund, 2001) という意味で用いられる。Sameroff & Emde (1989) は感情 emotion を心理的経験の中心と考え、経験のオーガナイザー、つまり子どもの中に生まれつつある自己感の主要な構

成要素であると述べている。Stern も情動こそが人生早期におけるコミュニケーションの基本的媒体かつ基本的主題であるとし、Storolow et al. の間主観性理論においても情動が主体的体験の中核にあるとされている。本研究でもクライアントを理解し関係性を築く上で情動を中核概念として考える。

(2) 実践能力

本研究では Cl. の情動（情緒）を理解するプロセスにおいて Th. が用いるあらゆる方法を実践能力と定義する。

(3) 感情共鳴、情動共有

Stern は誰かの示す情動を見たり聞いたりすることで、自分の内部に情動が自然に誘発されることであるとしている。Hoffman (2000) は他人についての代理的な感情的反応であるとし、他人が感じているように自分が感じることであるとしている。本研究でもこの概念を適用する。

(4) 間主観性理論

主観性の発現と変容の描写を意図し、その（発現と変容）のプロセスの起源を関係性に求める。間主観性はそれぞれ別個にオーガナイズされた主観性同士の相互交流により形成されたフィールドである。間主観的に形成された2人の体験を共に解説することによりその内の一人の情緒体験のオーガナイズーションを理解しようとする考え方を間主観性理論という (Orange, 1995、Storolow et al., 1987)。

2. 研究1 臨床経験年数による Th. の実践能力とその変容についての質問紙

2-1. 方法

多くの調査対象者から個人の内面を幅広く把握できる質問紙法と自由記述法を採用し、調査を行った。本研究は経験年数の多様さに着目した研究であるため、初心者から熟練者への調査実施を配慮するが、実践のフィールドは限定せず遊戯療法を連続的に経験している Th. に調査を依頼した。多くのデータは信頼性の確保に繋がり一般化を可能にする。臨床経験年数に分け隔てなくデータを得られる質問紙や自由記述法は本研究には適していると考えられる。

現在、遊戯療法を行なっている Th. 96名を分析の対象とした。所属機関の内訳は、近畿圏の大学院に通う大学院生40名（男性10名、女性30名）、心理判定員、相談員（所属機関は不明）47名（男性21名、女性26名）、SCなどの教育関係4名（男性1名、女性3名）、その他5名（男性3名、女性2名）であった。各経験群の性別と年代の内訳を Table 1 にまとめた。調査は平成23年度7月中旬から平成23年度11月中旬にわたって実施した。調査用紙を手渡しにて配布し、後日、直接または郵送にて回収した。配布先は近畿圏の大学院、筆者の実習先である児童養護施

Table 1. 経験群と性別、年代のクロス表 (1)

	性別		年齢				全体
	男性	女性	20代	30代	40代	50代	
初心者群	8	30	33	2	2	1	38
中期群	17	14	18	10	3	0	31
中長期群	3	9	0	12	2	1	15
長期群	7	8	0	6	4	2	12
全体	35	61	51	30	11	4	96

設、児童養護施設関連の学会、その他プレイセラピーを行なっている対象者に協力を依頼した。

1-4の「本研究の基礎となる理論的枠組み」からTh.の実践能力とその変容過程についての調査を行うため質問項目を作成した。質問紙のフェイスシートは、所属、年齢、性別、臨床経験年数など個人属性に関する項目とプレイセラピーの経験年数、担当Cl.数、プレイセラピーのスタイルや枠組み(理論、技法)、スーパーヴィジョン(以下、SV)の頻度などに関する質問項目から成る。

Th.の実践能力に関する「情動調律」の調査項目については、Sternによる情動調律の一般的特性である、強さ、タイミング、形を含む応答の内容を取り入れ、遊戯療法の場面に沿うような内容に変更し作成した(11項目)。「共感的応答」については、他者への関心の方向性などの違いと共感性の認知側面との関連を調査した「他者関心度尺度」(三原,1998)から4項目、共感性の感情的側面に特化した「共感的感情反応尺度」(葉山ら,2009)から4項目、そのほか弘中の言うメタファーへの応答や共感的反応から必要と思われる項目を作成し、追加した(10項目)。「情動共有」については、共感性プロセス尺度(植村ら,2008)の感情の共有因子から5項目、同情を主体とした他者志向的反応3項目、他2項目は遊ぶことを主体とした項目を作成し追加した(10項目)。「精神分析的理解」に関しては、精神療法における治療者の行動・態度の4つの因子(武島ら)から力動的理解の枠組み因子3項目、「他者関心度尺度」(三原,1998)から精神分析に関連すると考えられる2項目、他必要とされる項目1つを取り入れた(6項目)。その他、非指示性など武島らの研究からの示唆を得て、必要と思われる項目を取り入れた。質問項目は46項目から成り、「全く当てはまらない」(1)～「非常によく当てはまる」(7)までの7件法で回答する。

質問紙の項目については因子分析を行い、そこで得られた因子得点を各経験群におけるTh.の実践能力の指標とする。主因子法により因子を抽出した後、プロマックス回転により因子を抽出する。臨床経験年数と各因子の影響を一要因分散分析、担当Cl.数や、SV、男女差については二要因分散分析にて分析を行う。

2-2. 結果

因子分析には46項目中、分布に偏りのある20項目を覗いた26項目を用い、主因子法により因子を抽出し、プロマックス回転を行った。抽出された5因子の因子負荷量0.4以上もしくは-0.4以下の項目を採用した。プロマックス回転後の最終的な因子パターンを Table2 に示した。抽出された因子について、第1因子はCl.の情動にTh.が共鳴し、Cl.と情動の繋がりや重なりを表す項目から「情動共有因子」と命名された。第2因子では非言語的な情報を読み取りかつCl.の表現に適した応答をすることでCl.理解に繋げることから「共感(情緒)応答因子」と命名された。第3因子は無意識や分析と関連することから「精神分析的理解の因子」、第4因子はTh.の柔軟さを表す項目から「Th.の柔軟性・開放性因子」と名付けられた。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、第1因子で.82、第2因子で.80の十分な値が得られ、第3因子で.65、第4因子で.62の値ではやや低めの値であった。なお、第5因子は「観察力因子」と命名されたが.35と十分な値が出なかったため本研究では分析対象から外された。

経験毎の各因子得点の比較については、平均値を Fig. 1に示した。分散分析の結果、第1因子「情動共有因子」については、有意な経験年数の主効果が見られた ($F(3,89)=3.08$, $p<.05$)。多重比較 (Bonferroni 法) の結果、初心者群と中長期群の群で有意な違いが見られた ($F(3,89)=2.70$, $p<.05$)。第2因子の「共感(情緒)応答因子」については有意な経験

Table 2. Th. の実践能力尺度の因子分析結果

項目内容	因子				
	I	II	III	IV	V
クライアントが楽しそうにしていると自分まで楽しくなる。	.883	-.143	-.098	.026	-.106
クライアントが嬉しそうにしているのを見ただけで自分も嬉しくなる。	.792	-.018	-.120	.007	.094
クライアントが幸せそうにしている光景をみると、暖かい気持ちになる。	.766	-.141	.088	.217	.001
クライアントが何かに喜んでいても、私は嬉しい気持ちにならないほうだ。 (*)	.709	-.152	-.024	.020	.106
クライアントが悲しんでいると、かわいそうだと思う。	.570	.292	-.329	-.117	-.100
クライアントが不安を感じていると、自分も同じ気持ちになる。	.457	-.019	.073	-.075	-.101
クライアントの主訴や生育歴を考慮してクライアントの気持ちを理解している。	-.020	.684	.004	.073	-.177
クライアントの表現にタイミングよく応答している。	-.013	.673	-.060	.176	.174
上記(遊び)の表現に対して遊びでクライアントの気持ちに込めている。	-.052	.565	.048	.208	-.131
クライアントが求めている応答をしていると感じる。	-.164	.554	-.063	-.021	.097
気がつくクライアントの表現に合わせて自分の応答の速さを調節している。	.036	.492	.020	.272	-.088
プレイセラピー中、クライアントの表情のわずかな変化も感じ取れる。	.064	.480	.009	.087	.326
クライアントの表情やしぐさでクライアントの思っていることが分かる。	-.104	.451	.079	-.133	-.063
プレイセラピーにおいて無意識という概念が役立つことがある	-.270	-.061	.698	.109	-.190
プレイセラピーの間、クライアントの心の動きを分析している。	.038	.078	.568	-.156	-.070
クライアントに洞察を与えるようなやりとりを心がけている。	-.109	-.053	.530	.166	.075
クライアントの遊びからクライアントの表現を読み取る	-.042	.232	.415	-.080	.148
クライアントに自分の感情を素直に表せる。	-.042	.140	-.130	.653	.051
プレイセラピーの間は緊張していると感じる。 (*)	-.115	.142	-.080	.578	-.033
プレイセラピーの間、私はクライアントの表現に合わせて身振り手振りを交えて応答する。	.273	-.111	.167	.438	-.057
プレイセラピーの間、私は表情が豊かであると感じる。	.212	.027	.251	.416	.072
クライアントのちょっとした変化でも見逃さない。	.264	.217	.169	-.045	.654
クライアントのことをしばしば思い巡らす。	.206	.057	.199	-.009	-.580
クライアントのことをあれこれと考えることが多い。	.338	.231	.140	-.138	-.556
<残余項目>					
自分の言葉がクライアントにどのように受け取られたか察しがつく。	-.056	.390	.157	-.172	.361
プレイセラピーの間、クライアントの考えを絶えず読み取ろうとしている。	.227	.093	.348	-.177	.076
因子寄与	4.824	3.723	2.349	1.724	1.430
寄与率 (%)	18.554	32.874	41.904	48.538	54.038

*印は逆転項目

年数の主効果が見られた ($F(3,89)=6.05, p<.001$)。多重比較では初心者群と長期群 ($F(3,89)=3.09, p<.01$)、中長期群と長期群 ($F(3,89)=3.91, p<0.5$) でそれぞれ有意な差が見られた。第3因子の「精神分析的理解の因子」では有意な経験年数の主効果が見られた ($F(3,89)=4.39, p<.01$)。多重比較では初心者群と長期群で有意な差が見られた ($F(3,89)=3.62, p<.01$)。第4因子では有意な経験年数の主効果が見られなかった。

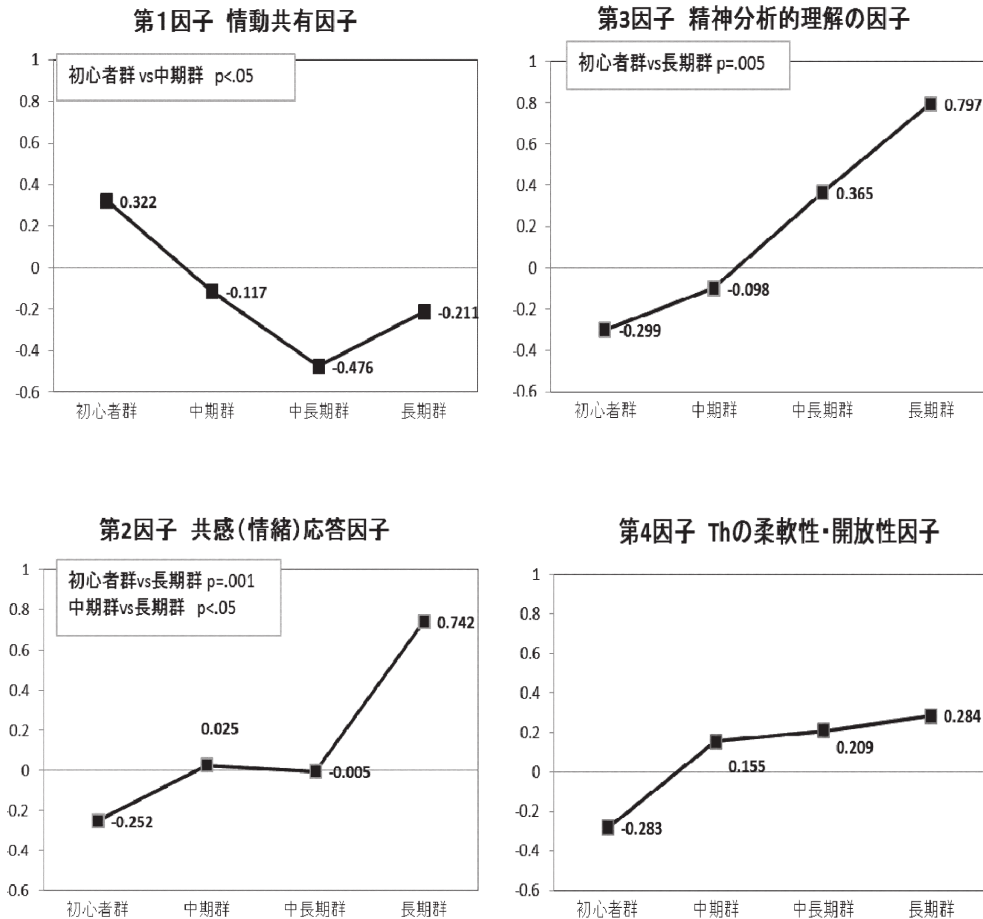


Fig. 1 経験群毎の各因子得点の平均値

3. 研究2 遊戯療法の臨床経験に影響を及ぼした体験と CI. 理解のプロセス変容の自由記述

3-1. 方法

調査対象者や調査時期、場所は研究1と同じである。分析対象は回答が得られた68名（初心者群28名、中期群25名、中長期群8名、長期群7名）である。

Table 3. 経験群毎と性別、年代のクロス表 (2)

	性別		年齢				全体
	男性	女性	20代	30代	40代	50代	
初心者群	5	23	25	0	2	1	28
中期群	15	10	16	6	3	0	25
中長期群	5	3	0	6	1	1	8
長期群	2	5	0	4	2	1	7
全体	27	41	41	16	8	3	68

調査項目は、自由記述法を用いて遊戯療法の臨床活動に最も大きな影響を与えている体験（獲得過程）と CI. 理解のプロセス（以下実践能力）の変容の記述を求めた。分析方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下、1999）を用いた。スーパーバイザーの指導を得ながら基本的に一人で分析を行なった。分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連箇所に着目し、それを一つの具体例として、かつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる、説明概念を生成した。概念を作る際に分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入した。同時並行で、他の具体例をデータから探し、ワークシートの具体例欄に追加記入した。具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断した。生成した概念の完成度は類似例の確認だけでなく、対極例についての比較の観点からデータを見ていくことにより、解釈が恣意的に偏る危険性を防いだ。その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入していった。次に生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にした。なお、同一調査対象者による複数カテゴリーの回答はそれぞれを1として集計された。

3-2. 結果

(1) 遊戯療法の臨床経験に影響を及ぼした体験

分析の結果から7つのカテゴリーに分類された (Table 4)。I. 遊戯療法の実践で体験した事柄を表す《臨床経験》、II. 遊戯療法の実践に直接関係のない体験を《人生経験》、III. 遊戯療法に関してSVを受けた体験を《SVの効果》、IV. 学会やカンファレンスでケースを発表した体験を《ケース発表》、V. 研修会やセミナー受講による体験を《研修会参加》、VI. 遊戯

Table 4. 修正版グランデッドセオリーの結果 (1)

カテゴリー	概念	定義	バリエーション
I. 臨床経験	Th.の介入体験	ある出来事をきっかけに Th.が Cl.に引き合い、介入していく体験	No.23Cl.が「何で避けんの?」と寂しそうにつぶやいた時に箱庭や遊びの中でのメッセージを受け止めずに逃げていたことに気づいた。そこから本気でぶつからないと思うようになった。No.51日常生活で Cl.が起こしたトラブルの影響が出ていると思われた時期の直面化に葛藤し、Cl.が求めた本気というもの向き合おうとした。No.57Th.がオープンにならなければ Cl.もオープンにならないし、ラポールも形成されないことに気がつかされたこと。
	Cl.の感情や表現から Cl.の内的世界に引き込まれる体験	ブレイルームで Cl.の感情や表現に Th.が何らかの影響を受けその後の臨床経験にも影響を与えている体験	No.81毎回混沌とした世界へワープしているような感覚で、セラピー後すぐに日常へ戻ることが難しく一時間ほど動けなかった。No.77子どもの表現（ごっこ遊びや語り）に惹きつけられ、また圧倒される中で自分自身の問題もみつめるようになったこと No.54Cl.の怒りの表出
	気持ちの共有体験	プレイセラピー中に気持ちを共有出来たと感じた体験	No.30ごっこ遊びの中で Cl.の世界観を共有できたと感じたこと。No.72何気ないしくさから感情を共有できたとき
	プレイセラピーの体験そのもの	プレイセラピーにより自己の変容が起こり、その後のプレイに影響を与えている体験	No.25普段の人との会話の応答が変わった。No.26子どもが好きになったこと
	自己内省の体験	自己の臨床経験を振り返り反省した体験	No.45一度時間枠がもれず1時間45分の間セラピーを行ってしまったことがあった。No.60プレイセラピーや解釈の応答を繰り返していたら子どもに「うるさい! 遊びに集中させろ」と言われたこと
	イニシャルケースの体験	初めて受け持つケースからその後の臨床経験に影響を与えている体験	No.17イニシャルケースにおける終結までの全てのプレイ No.71イニシャルケースの子との出会い、及びその子とのプレイセラピー体験
	中断ケースの体験	ケースの中断による出来事が後の臨床経験に影響を与えている体験	No.50セラピー1年めで Cl.が Th.交代を申し出たこと。No.34Cl.が来談しなくなった
II. 人生経験	終結ケースの体験	ケースの終結による出来事が後の臨床経験に影響を与えている体験	No.6終結の出来事 No.59プレイセラピー終結になった最終セッションで Cl.が Th.に対し陽性感情を向けていたこと
		臨床経験以外で過去に子どもと関わった経験や、子ども時代の体験。ライフイベントなど、臨床場面以外の体験	No.16良くも悪くも育児、子育て経験 No.70高等専門機関への進学 No.13自分自身の喪失経験 No.1これまでの人生経験 No.79動物、本との関わり No.52小学校の時に死について考えたこと。中学校の時に虐待を受けた子ども、障害をもった子どもと関わったこと。
III. SV の効果		SV を受けてケースや Th.の態度に何らかの変化が見られた体験	No.32スーパーバイザーとの話し合い No.41SV を受けたこと。No.46SV において Th.自身の特徴を知り応答の仕方1つで展開が多種多様になっていくことを知ったこと No.39,14,12,15SV
IV. ケース発表		学会やカンファレンスでケースを発表した経験から自分の臨床経験から振り返り反省した体験	No.7学会等でケース発表するためにケースを見直しまとめ直す時の色々な発見、反省が大きな影響を与えている。
V. 研修会参加		研修会やセミナー受講が自己の臨床経験に影響を及ぼした体験	No.75対象関係論の研修に出て多くの学びを得た No.31精神分析セミナー受講
VI. プレイ以外の臨床経験		プレイセラピー以外で自分の臨床経験に影響を与えていると思う体験	No.95小学校現場でのマンツーマンのかかわりを通して相手の成長を見られたこと No.28PDD 児との関わりや観察する眼
VII. 自己理解		教育分析や自己セラピーなどを受け、自己の理解をより深めた体験	No.3自己洞察をして自分自身の理解を深めたこと No.76自分が個人セラピーを受けたこと

療法以外の臨床場面での体験を《プレイ以外の臨床経験》、VII. 教育分析や自己セラピーを受けた体験を《自己理解》。経験群別の結果を Fig. 2 に示した。どの群も《臨床経験》から最も影響を受けているという結果であった。初心群は《臨床経験》の他に《SV の効果》があげられた。中期群は《臨床経験》の次に《人生経験》が多くあげられ、その次に《SV の効果》という結果であった。また、《ケース発表》も小数であるが見られた。中長期、長期になると《SV の効果》はなくなり、《研修会参加》、《自己理解》、《プレイ以外の臨床経験》などに分散する傾向が見られた。また、長期群は一つの体験よりも複合して回答する傾向が見られた。

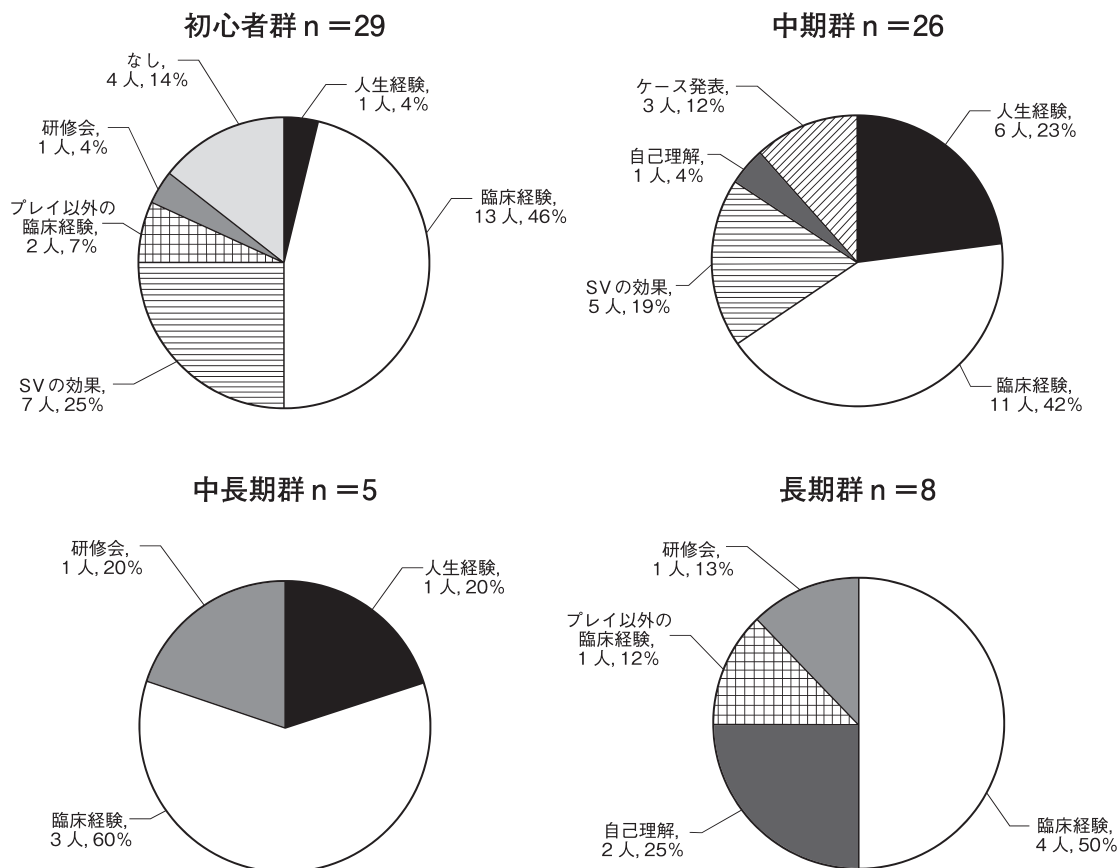


Fig. 2 経験群毎の臨床活動に影響を及ぼしている体験

(2) Cl.を理解するプロセスの変容について

分析の結果から Cl. 理解の方法は次の 6 つのカテゴリーに分類された (Table5)。I. Cl. と自己の気持ち両方を感じながら Cl. を理解する<相互主観性>、II. Th. の感受性や Cl への関心や理解する姿勢を含む Cl. 理解を<Th. の共感性>、III. 見立てや偏った見方に囚われずに Th. が自然な状態で Cl. と関わる態度を<Th. の柔軟性>、IV. セラピー以外の情報 (生活面、生育歴、家族関係など) を参考に Cl. を理解する<コンテキスト把握>、V. Cl. や自己の気持ちを客観的に捉えることが可能となり多面的な視点で Cl. を理解する<観察自己>、VI. 転移・分析などを中心とした<精神的分析的理解>である。経験群別に Fig. 3 で示した。初心者群は<相互主観性>、中期群は<Th. の共感性>、中長期は<Th. の柔軟性>、長期群は<Th. の柔軟性><Th. の共感性>が最も多かった。長期群はサンプル数の影響も考えられるが、初心者群と中期群に比べて分散することなく 4 つのカテゴリーにまとめられた。

Table 5. 修正版グランデッドセオリーの結果 (2)

カテゴリー	概念	定義	バリエーション
I. 相互主観性	Th.の情動による Cl.理解	Cl.だけでなく Th.自身の気持ちも感じ取りながら Cl.を理解する。	No.11 Cl.だけでなく私の気持ちを含め理解しようと心がけています。No.39 Th.が感じたことを元に捉えるようになった。No.37 Cl.と接する自分自身の気持ちを汲み取って Cl.を理解しようとしている。No.92 Cl.だけでなく自分自身の心情や要因も考えながら Cl.と接するようになった。Th.が感じたことにも目を向けるようになった。
	関係性における相互作用	Cl.と Th.の相互作用により Cl.を理解する。	No.59 Th.-Cl.の関係で出されている感情というものに注目 No.71 自身と Cl.の関係性の中で捉える視点や姿勢へと変わってきた
II. Th.の共感性	Th.の感受性	Th.の感受性や感覚能力により Cl.の状態を理解する能力。	No.23 初めの頃よりは気持ちを理解する時間が短くなったように思う。No.24 最初は言葉に注目していたが、表情や、間、行動から感じ取るようになった。No.89 今の方がその場で理解できるようになった。No.81 今ではそこまで意識せずとも伝わってくる (感じ取れる) ようになってきている。
	共感的関心	Cl.の気持ちを理解しようとする関心を持って応答する態度	No.9 今では Cl.に聴こうとしているところ。No.10 Cl.に沢山の質問をしたり、積極的に聴こうとする姿勢が Th.には必要だということが分かり (中略) 分からないことははっきり尋ねて理解しようとするようになったと思う。
	共感的理解	Cl.の表現を理解しようとする態度	No.45 Cl.が私に向けて取る行動の背景にある気持ちを理解するよう努めたい。No.72 遊びや動作しぐさの一つ一つに意味があり、それを理解しようとする姿勢が Cl.理解に繋がっていくことを強く感じる。
	受容	Cl.の気持ちに寄り添う	No.12 ともに寄り添うかわりになってきたように思う。No.55 こちから一方的に解決することからなるべく寄り添って体験を共有できるように。
	遊びの筋を理解	遊びの流れから Cl.を理解する。	No.21 筋が見えるので焦りや戸惑いが減りゆったり待てる心境になったと思う。No.13 流れの中で判断するようにしている。
III. Th.の柔軟性	柔軟性	見立てや偏った見方に囚われずに Th.が自然な状態で Cl.と関わる態度。	No.1 自由に子どもと気持ちを共有するようになった。枠にとらわれすぎない程度に No.6 今では自由に自分らしくやっているとと思う。No.95 心が遊ぶということが難しくなっている No.76 自分のオープンさ No.94 プレイを楽しめるようになった。
	ゆとり	緊張がなく Th.の気持ちにゆとりがある状態。	No.15 少し緊張がほぐれ、セラピューティックになってきました。No.27 余裕を持って Cl.を見る。No.27 初めは一緒に遊ぶだけで手一杯だった。落ち着いて取り組むことができた。No.94 プレイを楽しめるようになった。
	非指示的態度	遊戯療法の場面で Cl.の気持ちを先導する関わり。	No.4 子どもの気持ちが動き出すまで待つことが出来るようになってきた。No.13 今では「自分」はいったん横において「この子」がどう感じているのかを感じようと努めている。また、よくわからないときはとりあえず「わからない」として置いておく。急がないように気をつけている。
IV. コンテキスト把握	生活史コンテキスト、包括理解	Pr.以外の情報を参考に Cl.を理解する。	No.14 生育歴から流れを追って理解するようになった。No.42 他の情報 (親担からの情報) を聞いたりして、Cl.の置かれている状況もふまえて総合的に Cl.の気持ちを理解するようになった。No.90 ケースの流れや家族関係などの視点から全体的に広い視野で Cl.のことを考えるようになった。
	アセスメント能力	Cl.を知るために情報を入手し Cl.をアセスメントする能力。	No.16 見立ての深さが初めの頃より現在の方がるように感じられる。No.36 必要と思う情報を聞くようになった。
V. 観察自己	観察自己	自己の感情と距離を取ることが出来る。	No.53 Cl.と関る私とそれを見ている私が今はいる。No.23 初めの頃は Cl.の言動に巻き込まれたいたが、今では少し距離を置いて冷静になるように心がけるようにした。
	客観的視点の獲得	視野を広く持つことで全体像を把握	No.28 ひとりよりがりではなく、スーパーバイザーの考えや他の人からの意見を聞いたり相談するようになった。No.17 相手を見るポイントが増えた
VI. 精神分析的理解		転移・分析を用いて Cl.を理解する。	No.3 Th.の逆転移が Cl.の転移での表現との区別を感じられるようになった。

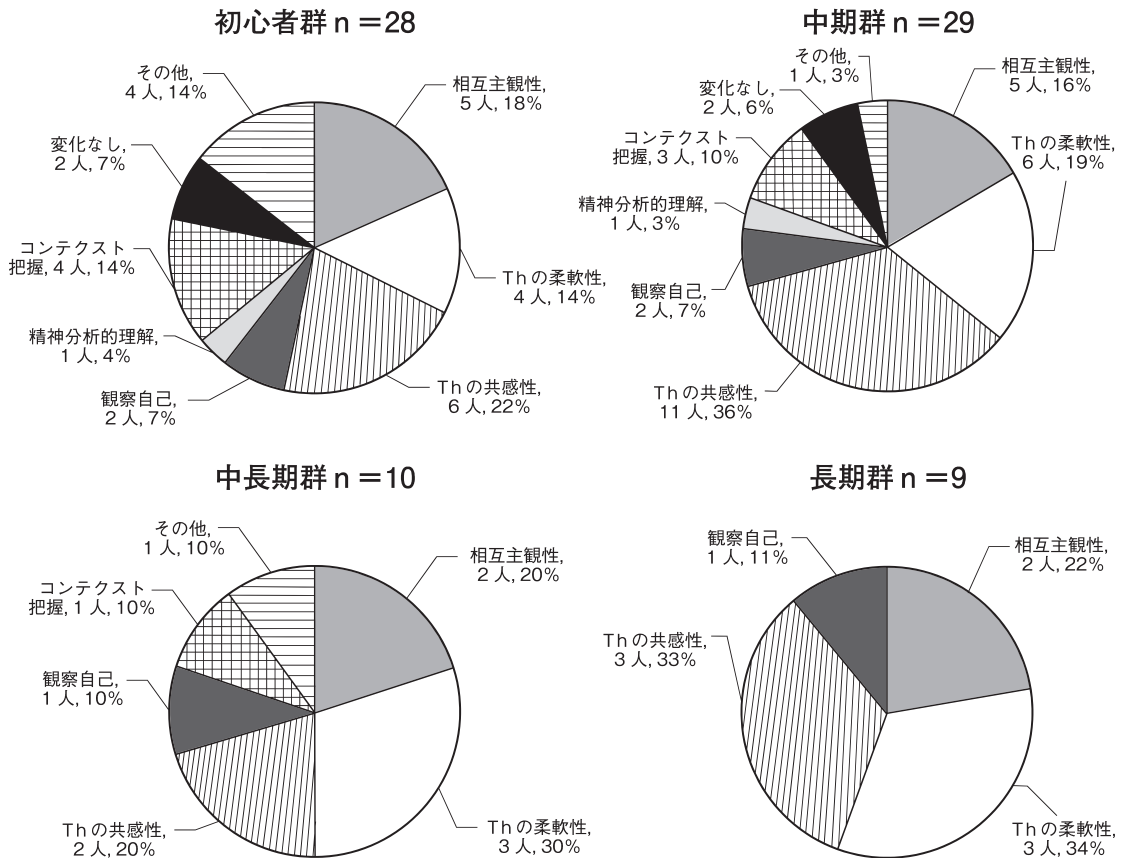


Fig. 3 経験群毎のCl. 理解の方法

4. 仮説についての結果

(仮説1) 研究1の因子抽出結果は「情動共有」「共感(情緒)応答」「精神分析的理解」「Th.の柔軟性・開放性」の4因子であった。「情動調律」の項目は「共感(情緒)応答」と「Th.の柔軟性・開放性」の項目に分散した。累積寄与率については48.54%であった。研究2のCl.理解のプロセスでは6つのカテゴリーが生成された(Table5)。

(仮説2) 因子分析の結果、「情動調律」は「共感(情緒)応答因子」と「Th.の柔軟性・開放性因子」に分散した。実践能力尺度の構成概念である「情動共有」で構成される「情動共有因子」の因子得点は、初心者群と中長期群の間に有意な違いが見られた($F(3,89)=2.70$, $p<.05$)。因子得点では中長期群までの点数は低くなるが、長期群になると上昇傾向が見られた(Fig.1)。研究2では、「情動共有」の構成概念に一致すると考えられる<相互主観性>の割合は中期群よりも初心者群の方が高く、中長期群、長期群よりは低い結果となった。

(仮説3) 「情動調律」と「共感的応答」の項目で構成された「共感(情緒) 応答因子」が抽出された。多重比較では「共感(情緒) 応答因子」の初心者群と長期群 ($F(3,89)=3.09, p<.01$)、中長期群と長期群 ($F(3,89)=3.91, p<0.5$) でそれぞれ有意な差が見られた。因子得点からも長期群になるほど上昇の傾向を示した (Fig. 3)。第3因子の「精神分析的理解の因子」では初心者群と長期群で有意な差が見られた ($F(3,89)=3.62, p<.01$)。因子得点からは長期群になるほどやや上昇の傾向を示した。研究2では<Th.の共感性>は中期群と長期群の両群で高い割合を示した。初心者群と中長期群はほぼ同じ割合を示した。<精神分析的理解>は初心者群と中期群に見られ、中長期群、長期群には見られなかった。

(仮説4) Fig2.から、全ての経験群で臨床経験からの影響を受けているとの結果が得られた。同時に、初心者群と中期群は《SVの効果》、中期群は《人生経験》、長期群は《自己理解》などの影響因も明らかになった。

経験年数以外の影響因として考えられる男女差による経験年数の効果を確認するため、二要因分散分析を行ったが有意な主効果は見られなかった。その他の影響因 (SVの頻度、担当CI.数) についてはデータに偏りがあるため検定を行えなかった。

5. 考 察

研究1 臨床経験年数による Th. の実践能力とその変容についての質問紙

「情動共有」と定義された質問紙の項目は植村らの共感性プロセス尺度の「感情の共有」と「他者志向的反応」の尺度で構成される。「情動共有因子」はこれら二つの領域が抽出されており、Sternの「感情の共鳴」や鯨岡の「成り込み」と言われる、CI.との相互作用でTh.に湧き起こる情動を意味すると考えられる。データを分析した結果、当初4つの構成概念を設定し調査を行なったが、「情動調律」は「共感的応答」の項目と共に「共感(情緒) 応答因子」として、また、「Th.の柔軟性・開放性因子」として抽出された。1-4の本研究の理論的枠組みからSternの「情動調律」と「共感」は別であることを前提に質問紙を作成し調査を行ったが、「情動調律」と定義された項目のみでは抽出されなかった。青木(2008)は「共感」と「情動調律」の違いについて次のように述べている。「共感とは治療者が共感できているという自覚がある。しかし、情動調律が起こっている時には、半無意識的であり、意識の面では相手を理解しようとしている自分というものが浮かんでいる。共感したと思われる時点で、その場面を治療者自身の自己感覚として振り返り、再生することで共感のきっかけになった情動調律という行為を改めて同定することが出来る」。Th.が「情動調律」と「共感」の違いを識別することは難しく「情動調律」を含めて共感と捉えている可能性が考えられる。よって、「情動調律」と「共感的応答」の2つの応答はCI.を理解する試みとしては区別されることなく「共

感（情緒）応答因子」へと統合されたと考えられる。「Th.の柔軟性・開放性因子」はTh.のゆとりや表情や感情の表現の項目で構成される。感情や表情による表現は情動調律的な側面として捉えられていたが、Th.とCl.との関係性やTh.の資質によっては開放的になることに抵抗を感じるTh.もいるため、Th.の態度や資質である「Th.の柔軟性・開放性因子」として抽出されたと考えられる。

経験年数以外の臨床経験への影響因の男女差については分散分析を行なったが有意な差は見られなかった。従って、経験年数は男女の違いによる影響を受けておらず、経験年数を積んでいくことで男女間に実践能力の違いが生じることはないと考えられる。

研究2 遊戯療法の臨床経験に影響を及ぼした体験とCl.理解のプロセス変容についての自由記述

（1）遊戯療法の臨床経験に影響を及ぼした体験

全ての経験群で遊戯療法の臨床経験をあげたものが最も多かった（Fig. 2）。このことは実践能力が実践の場で育まれると認識しているTh.が多いことを意味している。初心者は一つのケースに終結まで携わった経験が少なく、場面単位で影響の体験を捉えており、中期群以降はケース単位で影響体験を捉えている傾向が見られた。これについては、鈴木の研究と同様の結果を示した。ケースは、イニシャルケース、中断ケース、終結ケースの3つの種別から成る。イニシャルケースは印象深くその後の臨床活動に影響を与える。Th.が自らの技量不足で中断したと考えるケースはTh.の態度を自省させる機会になる。中期群である程度の期間携わったケースの終結を経験する。ケースを通して自己の在り方を問い直し、今後の臨床の方向性を定める機会になると考えられる。ケース記録をまとめて、カンファレンスで発表する機会は、改めて自己とCl.に向き合う場面であり、ケース全体を客観的に振り返り、一つの過程として整理することが出来る。中期群はライフイベントが重なる時期に差し掛かり、多忙な時期を過ごす。Cl.と向き合うTh.は常に自分の不安と隣り合せである。ひとつの正しいやり方があるわけではなく、Cl.とTh.のペアの数の限り、ユニークでパーソナルな相互交流の方法がある（P. Buirski. et al, 2001）。初心者のTh.の不安はスーパーバイザーによる助言から軽減され、安心感に変わることもあれば、想像もしていない評価を受け、不安はますます高まることも考えられる。不安を和らげるのはCl.からセラピーやTh.への評価を直接的に得られることだろうと考えられる。初心者や中期群はSVからスーパーバイザーの評価を得ることで代理に達成される。従って、初期の頃はCl.よりスーパーバイザーとの関係性の方を重視することがしばしばあると考えられる。しかしながら、次第にTh.は目の前にいるCl.との関係性に重きを置くようになる。ある時期に、Th.はCl.の表現が深くなり今までのやり方ではCl.を理解するこ

とが出来ないことに気づかされる。Th. は自分の力量を磨くために研修会に参加し、遊戯療法を行う上での基礎理論を構築する者もいる。次第に遊戯療法以外の臨床経験を受け持ち、自己のセラピーや教育分析を受けることで Cl. だけでなく自己の問題とも向き合うようになる者もいる。傳田 (1998) は、「治療者が自己洞察している深さにおいてしか相手の問題は理解できない」と述べているように、相手を分かるにはまず自分を知ることだと立ち返る。Th. は臨床の場から多くのものを得るために自らの器を広げる努力をする。長期群の臨床経験は Cl. の表現レベルも深くなり、セラピーの内容はより深みが増してくる。同じ臨床の場であっても、気付きや洞察の深さは異なり、臨床経験から得られるものに差が出ると考えられる。そして、臨床の場で経験を積み重ね、自分のやり方に合う方法を身に付け、自分なりのスタイルを確立し個性化していくと考えられる。

(2) Cl. を理解するプロセスの変容について

Fig. 3 の結果より実践能力として6つのカテゴリーが生成された。初心者と中期群については6つのカテゴリーに分化している。中長期群と長期群については調査対象者数が少ないことも考えられるが、初心者群、中期群に比べてカテゴリーにまとまりがある。初心者群の Th. は今まで自分が取ってきた対人関係のパターンで Cl. を理解すると考えられる。臨床の場に持ち込まれたコミュニケーションパターンを SV やケース発表を活用し、Th. として望ましい態度へと修正されていくことになる。それぞれの修正箇所は、一人一人異なるためにカテゴリーが分化したと考えられる。修正を繰り返していくことで、Th. として相応しい態度への変容が一とおり完了し、ようやく中期群で Cl. の気持ちを理解し、伝え返していくことに専念出来るようになる。この時期は初心者群に比べて共感性の割合が増加する。中長期群は共感性の割合が減少するが、長期群で再び増加することから、内的世界へと深く入るに必要な共感性が特化され、引き出されていくようになると考えられる。初心者群、中期群の〈コンテクスト把握〉について、特に初心者群は Cl. を把握する感性や理解のアセスメントの能力が未熟であるため、生活や生育歴の情報を入手することで、全体像を把握すると考えられる。Rumelhart & Norman (1978) の学習の過程理論を参考に熟練の過程を考察すると、初心者の Th. は Cl. 理解のパターンを徐々に積み重ねて行き、獲得したパターンが適切であれば促進される。一般化や特殊化を繰り返しながら自分なりのパターンを構築し、定着させ、より正確に Cl. 像を掴んでゆくと考えられる。新保 (2004) の言う、「Cl. 理解は意識レベルから深層レベルで自動化される」ように、積み重ねられた技量は意識しなくとも体に染み付き、その人の併せ持つ要素と自然に調和し、Th. というよりむしろ、一人の人間の中に織り成される。長期群の〈Th. の柔軟性〉とは、そうしたより自然な状態として内在化された状態であるとも言える。

6. 仮説の検証に関する考察

(仮説1) Th.の実践能力尺度の構成概念である「情動共有」は研究1の「情動共有因子」に、研究2の<相互主観性>に対応すると考えられる。「精神分析的理解」は研究1の「精神分析的理解の因子」に、研究2では<精神分析的理解>に対応すると考えられる。両研究で概念の抽出が見られたことから仮説モデルの「情動共有」と「精神分析的理解」は支持されたと考えられる。一方、「情動調律」と「共感的応答」は、研究1、2でも独立した構成概念で抽出されなかったため、支持されなかった。

(仮説2) 研究1の「情動共有因子」について、初心者は5年以上10年未満の経験を積んだTh.よりも情動を共有させてCl.を理解すると考えられる。因子得点は初心者群が最も高くなり、中長期群までは下降傾向を示し、長期群では若干の上昇傾向を示す。研究2で「情動共有因子」に対応している<相互主観性>は全ての群で見られた。初心者群はTh.の情動状態によってCl.を理解する方法を主にとっているが、中長期群、長期群では、Cl.の表現はTh.との相互作用で生まれたものとし、Cl.の表現をTh.の情動や態度と関連づけてCl.を理解するというプロセスの違いが見られた。このことから、本研究で言う「情動共有」は、初心者群の実践能力であるという仮説は支持されたとと言える。なお、「情動調律」は検証が出来ず、初心者群の実践能力であるかどうか判別することは出来なかった。

(仮説3) 「共感的応答」については既に述べたとおりその構成内容において支持されない結果となった。「精神分析的理解」については「精神分析的理解の因子」が初心者群と長期群で有意な違いが見られたため、仮説3はこの点で支持された。これは長期群ほど遊戯療法の非言語性やメタファーの表現から遊びの多様性や不確実性を分析的な枠組みで捉えてCl.を理解する傾向があると考えられる。分析にはある程度の熟練を必要とするため長期群の実践能力であることが示唆された。一方、研究2の<精神分析的理解>は初心者群と中期群のみで見られ、中長期、長期群には見られなかった。中長期、長期群は調査対象者が少ないため、ここでは現状報告にとどめておく。なお、「共感(情緒)応答因子」の結果から、中期群は初心者群に、長期群は中長期群に比べて、非言語的な情報を読み取り、かつCl.の表現に適した応答でCl.を理解していると考えられる。中堅層の得点は横這いであるが、長期群のTh.に顕著な伸びが見られる。東山はTh.の成長段階で10年以降は自己理論の時代であるとし、この時期はCl.の世界がより理解できるようになっているとしている。

(仮説4) 結果から全ての経験群で自己の遊戯療法の臨床経験をあげたものが多かった。構成概念は当初の仮説モデルと同じでなく、仮説4は完全に支持されたとはいえないが、Th.の実践能力は臨床の場で培われると考えられる。しかしながら、SVや学会発表などは臨床経験に

深く関わる影響要因であるため、臨床経験以外のいくつかの要因が作用し合うことで臨床経験の場がより充実したものとなることも示唆された。また、同じ臨床経験であっても場をどのように活かすかは一人一人の Th. に委ねられていると考えられる。

7. 総合的考察

本研究は次の3つの研究目的① Th. の実践能力、②実践能力の変容、③実践能力の獲得過程を明らかにするために行われた。まず、① Th. の実践能力については、質問紙調査から「情動共有因子」「共感（情緒）応答因子」「精神分析的理解の因子」「Th. の柔軟性・開放性因子」4因子による Th. の実践能力尺度が作成された。研究1の質問紙では拾いきれない実践能力における構成概念の抽出が目的で行われた研究2では、＜相互主観性＞＜Th. の共感性＞＜精神分析的理解＞＜Th. の柔軟性＞＜コンテキスト把握＞＜観察自己＞のカテゴリーが抽出された。研究1と研究2から得られた結果により、Th. が Cl. を理解する過程を多面的に捉えることが出来た。研究1と2より Th. の実践能力を整理すると次のとおりになる。

I. 相互主観性 Th. に起こる情動や Th. と Cl. の情動状態が相互に作用することで Cl. を理解し、関係性を築いてゆく能力（「情動共有因子」、＜相互主観性＞）。II. 共感性 Cl. の非言語的な表現を読み取り、適切な応答を Cl. に返すこと。遊びの流れや筋を掴み、Cl. に対して積極的な関心や理解を持つ姿勢や態度。（「共感（情緒）応答因子」、＜Th. の共感性＞）。III. 精神分析的理解 Cl. の遊びを象徴解釈し、無意識の概念を用いることや、転移感情を分析することで Cl. を理解する能力（「精神分析的理解の因子」、＜精神分析的理解＞）。IV. 柔軟性 非指示的態度を保ちながら Th. が自己の感情を自由に表現することが出来る能力。心にゆとりがあり自然な状態で Cl. と関わる態度（「Th. の柔軟性・開放性因子」、＜Th. の柔軟性＞）。V. コンテキスト把握 Cl. の生育歴や家族関係、生活の状況などセラピー以外の必要な情報を入手し、セラピー中も含めて包括的に Cl. を理解する（＜コンテキスト把握＞）。

VI. 観察自己 自己や Cl. を客観的に見つめることができる能力。視野を広く持つことで Cl. の状態を注意深く把握する能力（＜観察自己＞）

②実践能力の変容については、研究1から各因子の経験年数ごとの比較、研究2からは Cl. 理解の変容過程を検証することで、変容のプロセスを明確にすることが出来た。初心者は自己の情動を通して Cl. を理解し寄り添うことで関係を作る。Cl. を理解したいという意欲や姿勢を強く持っており、アセスメント力の未熟をセラピー以外の情報で全体像の把握に繋げる。熟練者は、Cl. の表現に対する理解もスムーズになり、Cl. との関係性の中で起こる Th. の感情もセラピーで扱えるようになる。セラピー中に客観的な視点を持ち、精神分析的な枠組みを用いると考えられる。熟練者は意識せずとも自然にこのような態度を取れるようになっていくと考えら

れる。

③の実践能力の獲得過程については、研究2の自由記述によりTh.が自覚している影響体験を幅広く抽出することが出来た。そして、その内容を分析することで経験群毎の影響体験を明らかにし、Th.の熟達化の過程を明らかにすることが出来た。経験年数を、2年の初心者群、その後は4年区切りの4群に振り分け調査を行なった、研究1、2とも4群の特徴に違いを確認することができた。従って、本研究の4群の設定は妥当であり、Th.はこの期間で変化の規則性があると考えられる。

初心者の実践能力として考えられていた「情動調律」と熟練者の実践能力として考えられていた「共感的応答」を含む「共感(情緒) 応答因子」について次のとおり考察する。Stolorow et al.はCl.の体験に対するTh.の応答として「情動調律」を用いることを提案している。Orange (1995)は情動表現に調律し応答することを共感理解の準備性、「情緒応答性 affective availability」という言葉で説明しており、情緒的な安心感ある雰囲気が治療関係を成功にもたらすと述べている。「情動調律」が起こるときにはなんらかの情動の共鳴や共有が生起していると考えられることから、「情動共有」から「情動調律」、「情動調律」から「共感」へCl.理解のプロセスは変容していくと考えられる。Stolorow et al.は子どもと養育者二者間の相互作用のシステム(情緒体験)の中で子ども時代に形成された体験のパターンや構造をオーガナイズングプリンスプル organaizing principle という言葉で説明している。Th.とCl.の相互作用により、新しい心理的構造、体験の新しいオーガナイゼーションが形成される結果、人は関係性に関する新たな見込みを獲得し、それによって新しいやり方で関係することが可能になる。本研究において、「情動調律」は確認できなかったが、遊戯療法においても「情動調律」や「情動応答性」はCl.理解へのアプローチとしては重要なTh.の応答であると考えられる。「情動共有」から始まり、共感の準備性としての「情動調律」、そして「共感」のプロセスがあり、受容された体験が、オーガナイズングプリンスプル(自己感)の変容という一連の過程と捉えることが出来る。つまり、Cl.を理解するプロセスとはオーガナイズングプリンスプルの変容の一過程とも言える。

8. 今後の課題

本研究はあくまでTh.の自己報告であり、かつ横断的な調査であるため、厳密な意味で検討したものとは言い難い。また、各群の人数や実践のフィールドに偏りがあるため統制する必要がある。自由記述に関するデータの解釈は不十分な点が多く再考の余地がある。本研究の質問紙では情動調律のコミュニケーションを検証することが出来なかった。そのため質問紙法以外の研究方法で情動調律を検証することが必要とされる。最後に、新たに見出されたTh.

の実践能力とされるカテゴリーの追試調査を行う必要がある。以上を今後の研究課題とする。

<文献>

- 安倍順子 (2010) プレイセラピストの訓練に関する探索的研究—遊戯療法過程理解のための三つの視点 教育実践研究 (18), 107-112, 2010-03
- 足立明久・森田喜治 (2002) 遊戯療法実践における非指示性とは、京都教育大学紀要 Ser, A. No. 100
- 相川充・藤田正美 (2005) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成、東京学芸大学紀要 1 部門 56 pp. 87-93
- 青木紀久代 (2008) 親—乳幼児心理療法における精神分析的発達理論と愛着理論—インターフェイスとしての間主観性的観察 精神分析研究、52 (1), 41-53
- Auerbach, A. H. ,& Johnson,M. (1977) Research on the therapist's level of experience. In A. S. Gurman and A. M. Razin (Eds.), *Effective Psychotherapy:A Handbook of Research*, NewYork: Pergamon.
- Axline,V. M. (1947) *Play Therapy*. Houghton Mifflin. Boston. 小林治夫訳 (1972) 遊戯療法、pp. 131-133、岩崎学術出版社 (2008)
- 相川充・藤田正美 (2005) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成、東京学芸大学紀要 1 部門 56 pp. 87-93
- Buirski, P. and Haglund,P. (2001) *Making Sense Together, The Intersubjective Approach to Psychotherapy*, Paterson Marsh Ltd, and the Rowman and Littlefield Group, 丸田俊彦監訳 (2004) 間主観的アプローチ臨床入門 意味了解の共同作業、岩崎学術出版社、pp. 20-24
- Caillois, R. (1958) *Les jeux et les homes*. Gallimard. 多田道太郎・塚崎幹夫訳 (1973) 遊びと人間 増補改訂版、講談社 (1981) p. 34
- Freud,A. (1974) *Writings of Anna Freud, Volume1,Intoroduction to Psychoanalysis:Lectures for Child Analysis and Teachers 1922-1935*, Mark Paterson Ltd. ,London 牧田清志ら監修 岩村由美子ら訳 (1981) アンナ・フロイト著作集第一巻 児童分析入門 児童分析における転移の役割 pp. 36-49 岩崎学術出版社、
- 東山紘久 (1982) 遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む、創元社、p. 18
- 東山紘久 (1999) プレイセラピストの成長と感受性、pp. 196-205 弘中正美 (編) 現代のエスプリ 遊戯療法、至分堂
- 弘中正美 (1999) 遊戯療法における統合性、pp. 5-14 弘中正美 (編) 現代のエスプリ 遊戯療法、至分堂
- 弘中正美 (2002a) 遊戯療法と子どもの心的世界、 p. 44 金剛出版
- 弘中正美 (2002b) 遊戯療法の理論化をめぐる、遊戯療法・遊びの治療的機能の検討から 臨床心理学 金剛出版 2001.1
- 弘中正美 (2008) 遊戯療法における実践的理論構築の試み 明治大学心理社会研究 第3号 2008
- 木下康仁 (1999) グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生、弘文堂、p. 236
- 葉山大地ら (2009) 共感的感情反応尺度の作成の試み 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集(18), 178-179, 2009-11-09
- Hoffman, M. (2001) *Empathy and Moral Development:Implications for Caring and Justice*, Cambridge University Press:New Ed 菊池章夫ら訳 (2001) 共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわりで、川島書店、p. 36

- Klein, M. (1975) *The Writings of Melanie Klein Vol. 1 Love, Guilt and Reparation and other works*. Hogarth Press Ltd., London 西園昌久・牛島定信編 (1983) M. クライン 著作集 1 子どもの心的発達 子どもの遊びにおける人格化、(1993) pp. 239- 251 誠信書房
- 鯨岡峻 (1999) 関係発達論の構築 間主観的アプローチによる、p. 135 ミネルヴァ書房 (2003)
- 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性、p. 121 ミネルヴァ書房
- 三原亘 (1998) 共感性尺度の認知的側面に関する一研究、性格心理学研究 第6巻 第2号 pp. 152-153、
- Moustakas, C. (1959) *Psychotherapy With Children: The Living Relation Ship*, Harper & Row Inc. New York 古屋健治訳 (1968) 児童の心理療法 遊戯療法を中心として p. 237 岩崎学術出版社、
- Moustakas, C. (1997) *Relationship Play Therapy*, A Jason Aronson Book, USA p5
- Orange, D. M. (1995) *Emotional Understanding: studies in psychoanalytic epistemology* The Guilford Press New York, pp. 5-6
- Rumelhart, D. E., & Norman, D. A. (1978). *Accretion, tuning, and restructuring: Three modes of learning*. In J. W. Cotton & R. L. Klatzky (Eds.), *Semantic factors in cognition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Sameroff, A. and Emde, R. (1989) Relationship disturbed in early childhood: a developmental approach 小此木吾吾監修、井上果子訳 (2003) 第2章 乳幼児の関係性の経験：発達的にみた情緒の側面、早期関係性障害 乳幼児期の成り立ちとその変遷を探る 岩崎学術出版社 pp. 39-61
- 新保幸洋 (2000) カウンセラーの熟達化及び成長・発達モデルの構築に関する研究動向 大正大学臨床心理学専攻紀要 3, 8-23, 2000-03
- 新保幸洋 (2004) カウンセラーの心理アセスメント能力の発達過程に関する研究、大正大学院研究論文集 (28), 244-256, 2004-03
- 冷水啓子 (1982) 長期に渡る学習Ⅱ、熟達者一初心者者の差異 波多野誼余夫 (編) 認知心理学講座 4 学習と発達、東京大学出版会、133-153
- Stern, D. N (1985) *The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Basic Books. New York p. 139.
- Stolorow, R., Brandchaft, B. and Atwood, G. (1987) *Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach* The analytic Press U. S. A 丸田俊彦 (1995) 間主観的アプローチ コファートの自己心理学を超えて (1999) pp. 78-86 岩崎学術出版社
- 鈴木陽子 (1995) 臨床場面における臨床家の行動特性および影響体験について熟練者と初心者を比較して名古屋大学教育学部紀要平成6年度発達臨床学専攻修士学位論文集231-232
- 武島あゆみら (1993) 精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度、カウンセリング研究 第26巻 第2号
- 丹下正一・日野弥恵 (1982) プレイ・セラピストのイメージについて一初心者と熟練者の比較—大阪市立大学生活科学学部紀要・第30巻
- 植村みゆきら (2008) 共感性と向社会的行動との関連の検討—共感性プロセス尺度を用いて—、筑波大学心理学研究第36号 pp. 49-56
- 矢野智司 (2006) 意味が躍動する生とは何か 遊ぶ子どもの人間学、世織書房、p. 113